# 萬葉の柳

山崎　馨

## 一　序言

萬葉集に登場する植物、いはゆる萬葉植物に関する研究は、すでに江戸時代末期に春登「萬葉集名物考」、鹿持雅澄『萬葉集品物解』などによつて始められてゐる。その後、この研究が展開した様相には目ざましいものがあり、その概略は佐佐木信綱『萬葉集事典』典籍篇、『萬葉集大成』第二十二巻、国語国文学研究史大成2『万葉集』下などによつて知ることができる。かうして萬葉植物に関する研究が進むにつれて、現存する萬葉植物をとりそろへて萬葉植物園と称する公園が各地（たとへば奈良春日大社　奈良明日香村甘橿岡、湯河原温泉、越中二上山麓正法寺など）に設けられ、萬葉植物は社会一般の人々にもなじみ深いものとなつてきたのである。しかし、萬葉植物については、その研究にしても社会への解放（公園化）にしても、著しく植物学的であつて文学的ではない。それは『萬葉集大成』第八巻に「萬葉集の植物」を担当された小清水卓二氏、松田修氏が、ともに植物学者であることにも端的に示されてゐる。その意味においては、萬葉植物の文学的研究は、いまなほ後進的であると言はざるを得ない。本稿は萬葉植物にかかはる文学的研究のささやかな試みとして、萬葉集に現れる柳を対象とし、その柳を詠む歌について考察することを目的としてゐる。引例にあたつては、原則として日本古典文学大系『萬葉集』に依ることとした。その際に柳の表記は萬葉集の原文のままとし、また、柳の歌には萬葉集に登場する順序に従つてアラビア数字による番

号（1～40）を付けることとした。

なほ、戸谷高明氏に「万葉集景物小論――柳――」（早稲田大学「学術研究」十号、昭和三十六年十一月）がある――筆者未見――ことを申し添へる。

## 二　柳と梅

さて、萬葉集において柳を詠む歌の数は四十首である。そこに柳の種々相が見られ、それらを考察するについては、様々な順序があるはずであるが、さしあたり考察の緒としてその初出の歌から採上げることとしたい。巻四までには柳の歌は見えず、巻五の「梅花の歌」に至つて初めて現れる。

1梅の花咲きたる園の阿遠也疑は萩にすべく成りにけらずや（5・八一七、粟田大夫）

2阿乎夜奈義梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし（5・八二一、笠沙弥）

3梅の花咲きたる園の阿遠夜疑を萩にしつつ遊び暮さな（5・八二五、土氏百村）

4うち靡く春の也奈宜とわが宿の梅の花とを如何にか分かむ（5・八二六、史氏大原）

5波流楊那宜萩に折りし梅の花誰か浮べし酒坏の上に（5・八四〇、村氏彼方）

このように「梅花の歌三十二首」は、その中に柳の歌五首を含んでゐた。即ちこの五首において、柳は単独に現れるのではなく、同季の風物たる梅と共に現れてゐるのである。5の春柳は、一次的には萩の枕詞であるにしても、それは梅林の中に靡く浅緑の柳をも背景として描いてゐるはずであつて、さうした二次的機能が有効にはたらいてゐることは、1234の内容から考へても明らかであらう。天平二年（七三〇）の正月、大宰府における早春の宴に生れた「落梅の篇」には、いづれも大陸から渡来したとされる梅と柳との交響があり、そこに色彩の美を添へ、風雅の興趣を高くしてゐる。

柳と梅との組合せは右の五首にとどまらず、さらに多数の例が見られる。

6梅柳過ぐらく惜しみ佐保の内に遊びしことを宮もとどろに（6・九四九、作者未詳）

20梅の花取り持ちて見ればわが屋前（や）の柳の眉し思ほゆるかも（10・一八五三、作者未詳）

21わが掃せる柳の糸を吹き乱る風にか妹が梅の散るらむ（10・一八五六、作者未詳）

23梅の花四垂柳に折り雜へ花にまつらば君に逢はむかも（10・一九〇四、作者未詳）

33春雨に萌えし楊奈疑か梅の花友に後れぬ常の物かも（17・三九〇三、大伴書持）

34遊ぶ現の楽しき庭に梅柳折りかざしてば思ひ無みかも（17・三九〇五、大伴書持）

38君が行もし久にあらば梅柳誰とともにかわが萢かむ（19・四二三八、大伴家持）

6は長歌に伴はれる反歌としての短歌で、柳の歌四十首の中では唯一の例である。神亀四年（七二七）正月、佐保の梅と柳とが織りなす佳景に心を奪はれ、授刀寮に監禁される結果となつた大宮人の作として異色であらう。

かくて柳と梅との共存は、柳の歌四十首のうちの十二首に及ぶのであつて、その組合せによる早春の景の美しさに人々の心が動いてゐたこと、その組合せが早春の風趣を相乗的にふくらませるものとして人々に愛好されてゐたことを知るのである。萬葉の柳は、33の歌に言ふやうに、まさに梅を友とするところに一つの特色を示すといふことができる。因みに、古今集の春には柳は乏しく、梅との共存はわづか一例（1・二六）にすぎない。

## 三　柳と鶯・柳と蛙

右に述べた組合せは、柳と梅、即ち植物と植物との組合せであつたが、これに対して柳（植物）と動物との組合せも見られる。

11うちなびく春立ちぬらしわが門の柳の末に鶯鳴きつ（10・一八一九、作者未詳）

12春霞流るるなへに青柳の枝くひ持ちて鶯鳴くも（10・一八二一、作者未詳）

17朝な朝なわが見る柳鶯の来居て鳴くべき森に早なれ（10・一八五〇、作者未詳）

梅と鶯とを組合せた歌は、萬葉集にあつてもすでに多数であるが、一方に柳と鶯とを組合せた歌がある。それは右のやうにわづかに三首ではあるが、やはり注目すべき存在と言ふべく、古今集の春にはもはやこの組合せを見ないのである。たをやかに萌える柳の枝先に鳴く鶯、そこにも萬葉の無名の歌人たちは、春の情感を託したのであつた。殊に珍重すべきは12の鶯であらう。この鶯は柳の小枝をくはへて飛ぶ鳥、いはゆる花咋鳥なのである。武田祐吉氏『萬葉集全註釈』には「花啄ひ鳥図案」を

示して次のやうに言ふ。

柳の枝に鶯の居て鳴くのを歌つてゐるが、正倉院御物の図案にある花喰ひ鳥の模様などを想ひ起してゐる叙述であらう。言語どほりに解しては、枝を口にしては鳴かれない。……美しい風景だが、作りもの風のところがあるのは、三四五句の叙述に、空想の要素があるからである。しかしそれがこの歌の特色になつてゐる。

花咋鳥の歌と見るべき作としては、萬葉集にはこのほかに長意吉麻呂の歌一首（16・三八三一）がある。拙稿「月の船漂流記」（『美夫君志』第九号）、拙稿「長意吉麻呂」（『萬葉集歌人辞典』）などを参照されたい。西域の香りも高い花咋鳥文様の鏡は、いまも西安の陝西省博物館に見ることができる。その花咋鳥が、萬葉の柳の歌にも鮮やかに飛んでゐるのであつた。平安時代になつては、花咋鳥は松喰鶴に移行する。そのことについては森豊氏『花喰鳥文様展開』（昭和四十九年、六興出版）を参照されたい。

次に、柳と河蝦との組合せを見よう。

10河蝦鳴く六田の川の川楊のねもころ見れど飽かぬ川かも
（9・一七二三、紺）

この歌では第三句までの序詞の中に河蝦も楊も含まれてゐるが、「ねもころ見れど飽かぬ川かも」と言ふその川は、結局のところ六田の川なのであって、その川に河蝦の美しい声が聞え、その川のほとりに楊が枝を靡かせてゐるのである。六田のあたりを流れる吉野川の好風を、河蝦と楊との組合せが飾る趣である。河蝦と組合せになる植物は、萬葉集においてはまだ一定せず、柳の場合は右の一首のみ、馬酔木の場合も一首（10・一八六八）、山吹の場合も一首（8・一四三五）である。然るに、平安時代に河蝦と山吹との組合せが決定的となつた。それについては『萬葉集の歌ことば』（有斐閣）所収の拙稿「かはづ」を参照されたい。

右に見てきたやうに、萬葉集において柳と組合せになつてゐる動物は鶯および河蝦であった。植物と動物との組合せがほとんど特定の組合せに固定されてゆく前の自由な空気を示すところにも、萬葉の柳の歌における一つの特色を見ることができよう。また、それがたまたま古今集仮名序の「花になくうぐひす みづにすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける」と符合してゐることも面白く思はれる。

## 四　柳の美と恋情

ここまでに見てきた柳の歌には、梅、鶯、河蝦などとの組合せのもとに、柳が詠まれてゐた。これに対して、柳を同季の景物としての他の植物や動物と組合せることなく、謂はば単独に柳の美を詠んだ歌も見られる。即ち左記の六首である。

9うちのぼる佐保の川原の青柳は今は春べとなりにけるかも（8・一四三三、大伴坂上郎女）

13霜枯れの冬の柳は見る人の萠にすべく萠えにけるかも（10・一八四六、作者未詳）

14浅緑染め懸けたりと見るまでに春の楊は萠えにけるかも（10・一八四七、作者未詳）

15山の際に雪は降りつつしかすがにこの河楊は萠えにけるかも（10・一八四八、作者未詳）

16山の際の雪は消ざるを水鶏らふ川の剛は萠えにけるかも（10・一八四九、作者未詳、剛を柳の誤写とする説による。あるいは楊の誤写か、後述）

19ももしきの大宮人の萠ける垂柳は見れど飽かぬかも（10・一八五二、作者未詳）

いづれも浅緑に萠える柳の美しさに注目してゐる。19の垂柳は大宮人の萠になつてゐるもので、や、異色ではあるが、柳の美を詠む歌としてここに並べておく。

かうした春の景物としての柳の美しさは、その自然美を賞讃されるにとどまらず、そこに春といふ季節における恋情を託すに足るものとして、しばしば現れてゐる。ここに柳が持つ自然美と春における恋情とが融合し、柳といふ植物と恋といふ心情とが結合して、萬葉集における表現美の一翼を担ふこととなつたのである。まづその歌を列挙する。

8わが背子が見らむ佐保道の青柳を手折りてだにも見むよしもがも（8・一四三二、大伴坂上郎女）

18青柳の糸の細しさ春風に乱れぬい間に見せむ子もがも（10・一八五一、作者未詳）

22春されば鶯垂柳のとををにも妹は心に乗りにけるかも（10・一八九六、人麻呂歌集）

23（前掲、10・一九〇四）

24大夫が伏し居嘆きて造りたる四垂柳の萠せ吾妹（10・一九二四、作者未詳）

25春楊鶯城山にたつ雲の立ちても坐ても妹をしそ念ふ（11・二四五三、人麻呂歌集）

27うらも無くわが行く道に安乎夜宜の張りて立てれば物思ひ出つも（14・三四四三・東歌）

28恋しけば来ませわが背子可伎都楊疑末摘みからしわれ立ち待たむ（14・三四五五、東歌）

29楊奈疑こそ伐れば生えすれ世の人の恋に死なむを如何に爲よとそ（14・三四九一、東歌）

30小山田の池の堤に刺す楊奈疑成りも成らずも汝と二人はも（14・三四九二、東歌）

31安乎楊木の張らろ川門に汝を待つと清水は汲まず立処ならすも（14・三五四六、東歌）

32安乎楊疑の枝きり下し薺種蒔きゆゆしき君に恋ひわたるかも（15・三六〇三、古歌）

36春の日に張れる柳を取り持ちて見れば都の大路思ほゆ（19・四一四二、大伴家持）

柳と恋情とのかかはりを示す歌は右の十三首であるが、そのかかはり方は必ずしも一様ではない。8においては、佐保道の青柳が作者にとつてはただの植物ではなく、わが背子が見らむ青柳なのである。佐保道に靡く美しい柳の枝に愛する人の面影を重ねて、柳を媒介とした交感を願ふ歌である。18においては、柳の美しさに動かされた心は、可憐なをとめを恋人として得たいと願ふ心でもあり、その微妙な重層を春風が吹く趣である。22においては、しだれ柳がたわわにしなふ有様に、わが恋情の具象を見るのである。柳の姿は緑もみづみづしくしなやかであり、それがまた作者の人を思ふ心の姿でもあつた。人麻呂の若き日の佳作であらうか。23は梅と共存する例ではあるが、柳と恋とがかかはる例でもある。その第四句は原文に「花余供養者」とあり、仏前に供へた梅と柳との美しさが仏の嘉するところとなつて、恋しい人に逢ふことができようか、といふ意であらう。然らば柳と恋とのかかはりに仏教が関与する珍しい作品である。24においては、題詞に「蘓を贈る」とあり、男が精魂こめて作つた柳の蘓を女に贈るときに添へた歌である。その柳の蘓に溢れるばかりの愛情を女が受止めてくれることを願つてゐる。25においては、春楊は第三句までの序詞の中にあり、しかも蘓の枕詞であるから、春楊と恋情とは、一見したところ、謂はば間接的関係にあるわけである。しかし、よく見れば、立ちても坐ても妹を思ふ男の背後には、近景に柳が風に揺れ、遠景の葛城山に白雲が立ちのぼる風景が、夢幻の如くにひろがつてゐるのであらう。これはまさしく絶妙の有心序と言ふべく、新古今集の春に見える藤原雅経の秀歌

しら雲のたえまになびく青柳の葛城山に春風ぞ吹く

が想ひ起される。27は雑歌の部にあるが、柳と恋とがかかはる歌であらう。路傍の柳が青やかに芽ぶく様を見て、恋しい人を思ひ出す趣である。その人との恋には、柳の芽ぶきにまつはつて忘れがたい思ひ出があつたのである。28は「垣つ柳」が詠まれてゐて、柳の自然美を詠む歌とは言ひ難いが、柳を垣にも用ゐたことを示すやうで珍しい。その枝先を手すさびに摘みながら男を待つ、古代東国の女の姿が思はれる。29、30も柳の自然美を詠む歌ではなく、柳の生命力と恋とのかかはりを詠んで異色である。この二首についてはまた後に述べる。31においては、芽ぶく柳の下を行きつ戻りつして男を待つ娘がゐる。汲みに来ながら汲まない水には、柳も映つて揺れ、娘も映つて揺れる。その娘の心は恋に揺れてゐるのである。32においては序詞に青柳が見えてゐるが、これも柳の自然美を詠むのではなく、この柳と「ゆゆしき君に恋ひわたる」身分違ひの恋の苦しみとの関係は間接的である。36は越中における家持の作で、題詞には「柳黛を攀ぢて京師を思ふ」と言ふ。歌には「都の大路思ほゆ」と言ふが、家持は越中の春に芽ぶく柳を手に持つて、都大路を彩る女人たちの柳の眉を思つてゐたのであらう。謂はば不特定の対象に寄せるほのかな慕情であり、それが望郷の思ひに重なるのであつた。20（前掲、10・一八五三）を下敷きとした作かとも思はれる。

## 五　柳の美と生命力

前節においては、柳の自然美を詠む歌、その自然美と恋情との融合を詠む歌などについて考へた。その中には、柳が自然物としての美を示すといふよりは、むしろ自然物としての強い生命力を持ち、それが恋情といふ心とかかはる歌も見られた。この「美と生命力」といふ観点に立てば、まづ注目すべきは柳の「かづら」あるいは「かざし」の歌である。

1（前掲、5・八一七）
3（前掲、5・八二五）
5（前掲、5・八四〇）
13（前掲、10・一八四六）
19（前掲、10・一八五二）
24（前掲、10・一九二四）
25（前掲、11・二四五三）
35しなざかる越の君らとかくしこそ楊奈疑蕘き楽しく遊ばめ（18・四〇七一、大伴家持）
38（前掲、19・四二三八）

39 青柳の上枝攀ぢ取り蘰くは君が屋戸にし千年寿くとそ（19・四二八九、大伴家持）

2（前掲、5・八二一）

21（前掲、10・一八五六）

34（前掲、17・三九〇五）

右の十三首が萬葉の柳における「かづら」「かざし」の歌である。それが十三首にも及んでゐることは、自然の植物としての春の柳が示す若々しい美しさによるのであり、その美しさが人々の髪を飾るものとして愛好されてゐたことを物語つてゐる。しかも、それは単に装飾の美としての愛好を集めたのではなくその根柢には柳を生命力に富む植物として尊重する古代の呪術的信仰があつたものと考へられてゐる。すでに西村真次氏『萬葉集の文化史的研究』（昭和二年）には、

一体カヅラは何の為めにするか、只だの装飾か、或はマジツクか。起源をいへば恐らく生命を長らふる爲めの呪的行爲であつたらうけれど、寧楽時代にはもはや装飾が主であるところの、いくらか呪的意味を伴つた年中行事の一つとなつてしまつた。

美しい草や木の花がカザシにされたが、それは一面装飾であつたけれども、他面に於いては本来のマジツクとしての性質が残り、生命の延長――即ち長寿がさうすることによつて得られると思つてゐたらしい。

と言ふ。右の十三首においては、39のみが本来の意味によつて「かづら」を詠んでゐる。これは天平勝宝五年（七五三）二月十九日、左大臣橘諸兄の家に催された宴の席で大伴家持が詠んだ歌であり、柳の蘰に託して、大樹と頼む諸兄の長寿を家持は祈つたのである。しかし、諸兄は当年すでに齢七十、その三年後に致仕、四年後に薨じた。

さて、柳の生命力については、「かづら」「かざし」を詠む十三首のほかに、さらに注意すべき数首がある。

7 霰降り遠江の吾跡川楊　刈りつともまたも生ふとふ吾跡川楊（7・一二九三、人麻呂歌集）

26 ……み雪ふる　冬の朝は　刺楊　根張梓を　御手に　取らしたまひて　遊ばしし　わが大君を……（13・三三二四、作者未詳）

29（前掲、14・三四九一）

30（前掲、14・三四九二）

32（前掲、15・三六〇三）

右の五首のうち、まづ7について言へば、これは萬葉の柳の歌四十首における唯一の旋頭歌である。その「遠江の吾跡川」

は所在について問題があるが、いまは棚上げとする。本稿においては、これを『萬葉集全注釈』に従つて相聞歌とせず、人麻呂の亡妻を悼む歌とする。吾跡川のほとりに立つ楊は、刈つてもまた伸びてくるといふ。そのやうな強い生命力を持つてゐるといふ。然るに、わが妻は死んで、もはやこの世に生き返つてくることはない、と嘆くのであらう。柳の生命力はここでは人の命のはかなさと対比されてゐるわけである。26は、ある皇子を悼む挽歌（作者は人麻呂か）の一部で、これも『萬葉集全註釈』によれば、

挿木の楊が根を張る意味に、サシヤナギネまで序詞。ハリアヅサは、弓弦を張つた梓で、梓弓のこと。

である。即ち、柳は生命力が強く、挿木によつて根を張り、増殖してゆく。そのことが古代人の知識にあつて、狩に用ゐる弓を表現するときの修辞にも生かされたのである。29については恋にかかはる歌として先に一言したが、楊ならば伐つてもまた生えるけれど、現世の人が恋に苦しんで死ねば、それでおしまひ、ふたたび生き返ることはない、と言ふ。柳の生命力と人の命のはかなさとを対比する意味で、この歌は7に類似してゐる。30についても恋にかかはる歌として先に一言したが、柳を水のほとりに挿木して栽培するにしても、すべて必ず根づくものとは限らず、なかには根づかない枝もある道理である。そこで、柳の枝が根づくかどうかによつて、物事の吉凶を占ふこともあつたらしい。結句の「汝と二人はも」の後に補ふべき意味については説が分れるにしても、この歌の序詞に柳の生命力、挿木による増殖が詠まれてゐることは明らかなのである。32についてもまた恋にかかはる歌として先に一言したが、その第三句までの序詞には、やはり柳の生命力が示されてゐるのであらう。柳の枝を苗代田の水口に挿して神を斎ひ、然るのちに稙を蒔く。それは柳の強い生命力が苗に乗り移つて、ゆたかな稔りにつながることを祈る、古代の呪術的行事なのであつた。柳の美と生命力は、かうした十数首によく現れてゐると言ふことができる。

## 六　柳の眉と街路樹

前節においては、柳の美と生命力とを採上げたのであるが、その柳の美については、さらに角度を変へて見るべき点がある。即ち眉と街路樹とである。まづ眉については左記の三首がある。

20（前掲、10・一八五三）

36（前掲、19・四一四二）

37梶の花　紅色に　にほひたる　面輪のうちに　青柳の　細き

眉根を　咲みまがり　朝影見つつ　少女らが　手に取り持たる　真澄鏡　二上山に……（19・四一九二、大伴家持）

20は柳の葉が眉のやうな形をしてゐるので、それを柳の眉と言つた譬喩である。この「作者は、他人の家に客となり、もしくは他郷に在つてこの歌を詠んでゐる」（『萬葉集全註釈』）らしく、他人の家なり他郷なりにおいて梅と柳とを組合せ、春の情趣を詠んでゐることになるが、その柳の眉はただの柳の眉ではなく、ここでは「わが屋前の」といふ限定のもとにある。従つて、わが家の柳を思ふときに、わが家に残してきたわが妻の眉が、その柳に重なつて思はれることは、極めて自然にあり得べきことであらう。『萬葉集代匠記』に「外ニ有テ梅ノ花ヲ取持テ見ルニ付テ宿ノ柳ヲ思ヒ出トナリ。柳ノ眉ニハ妻ヲ兼テ云ナルヘシ」とする解釈を捨て難い。36については、すでに第四節に一言したが、平城京の女人たちの、その柳の眉を思つて詠んだ歌かと考へられ、『萬葉集代匠記』は「下句ノ意、京ノ大路ヲ行カフ美女ノ黛ノ匂ヒヲ思ヒ出ルナリ。題ニ攀柳黛思京師トカケル黛ノ字、カネテ此意ヲ含メリ」と述べ、20との関係をも鋭く指摘してゐる。ただし、36が詠まれた天平勝宝二年（七五〇）三月には、家持の妻坂上大嬢は越中の国府にあつたと考へられるので、36における柳の眉は妻の眉に非ず、20における柳の眉が妻の眉であることと相違してゐる。37においては、二上山を導く長い序詞の中に「青柳の細き眉根を」と言ふ。柳の葉のやうな細い眉を朝の鏡に映してほほゑむ少女の紅顔を描いて、にほひ立つやうな官能美さへ漂はせてゐる。天平勝宝二年四月の作である。

かうして、柳の葉を女人の眉に譬へる歌は萬葉集に三首をかぞへることができる。ただし、これらの表現が漢文学の世界、たとへば

柳眉桃臉不勝春（蜀後主、甘州曲）

柳眉軽吐效顰葉（李商隠、真娘墓誌）

芙蓉如面柳如眉（白居易、長恨歌）

などと如何にかかはるかを知らない。柳の葉のやうな細い眉、美人の眉を形容して柳の眉と言ふことは、この日本の風土に自生して、然る後に漢文学と結びついたのであらうか。右の李商隠、白居易などは、時間的に言つて萬葉集の圏外である。

次に、街路樹の柳にかかはる歌二首について一言する。

8（前掲、8・一四三二）

36（前掲、19・四一四二）

大唐国の首都長安城を範として営まれた平城京は、当然のこととして、その都市計画において長安城に類似するところが多かつた。平城京の四通八達の街路に樹木を植ゑて、首都の景観を

飾り、かつは緑蔭に風をかよはせることも、その一例だつたのであらう。街路樹としてはすでに藤原京における橘があり、

橘の蔭ふむ路の八衢に物をそ思ふ妹に逢はずて（2・一二五、三方沙弥）

それが平城京にも受継がれてゐたことは、伝誦歌（6・一〇二七、天平十年）の存在からも推察されるのである。平城京の東市に（おそらく西市にも）植ゑられた木は、何の木とも断じかねるが、やはり街路樹であらう。

東の市の植木の木垂るまで逢はず久しみうべ恋ひにけり（3・三一〇、門部王）

このやうな平城京の街路樹として、柳もまた植ゑられてゐたのである。8については第四節に述べたが、ここでは佐保道の街路樹としての柳であつて、その柳に作者は恋情を託してゐる。36については第四節にも本節にも述べたが、契沖の冒の如く「京ノ大路ヲ行カフ美女ノ黛ノ匂ヒヲ思ヒ出ル」歌であつて、都の大路に並び立つ街路樹としての柳が、越中の柳と都の女たちの眉の美しさとを結んでゐるのであつた。かうして、わづか二首の歌ではあるが、街路樹としての柳が萬葉の抒情に与る姿を見ることができる。

## 七　表記と語源

ここまでに、柳の歌三十九首について種々の観点から考察してきたが、柳の歌はまだ一首残つてゐる。それは防人歌に見える。

40わが門の五株夜奈枳いつもいつも母が恋ひすす菜ましつつも（20・四三八六、矢作部真長）

故郷に残した母が、いつもわたしを恋しく思ひながら家業に精を出してゐることであらうと冒ふ。その真情はよく伝はるが、この歌における柳は「いつもいつも」を導く序詞の中にあるので、柳の歌としては特に見所はない。古代下総国の農家の門辺にも（11の歌参照）柳が立つてゐたことが知られる。ヤナギのギはギ乙類であるが、この歌ではキ甲類の仮名「枳」が用ゐられ、古代東国の方言音を示すかとも思はれる。ただし、巻十四における五例（27～31）ではギ乙類であるから、この一首を逸例とすべきであらうか。

萬葉の柳の歌四十首において、その表記に「柳」を用ゐる例は6 8 9 11 12 13 17 18 19 20 21 22 23 24 34 36 37 38 39などの十九首、「楊」を用ゐる例は7 10 14 15 25 26などの六首である。柳は「しだれや

なぎ」であり、楊は「かはやなぎ」であつて、7（川楊）、10（川楊）、15（河楊）などの例を見れば、萬葉集の表記においても、ある程度はその区別を意識してゐたかと考へられる。16（川之副）においても「副」は「柳」の誤写ではなく、あるいは「楊」の誤写であるのかもしれない。仮名によつて表記する例は1 2 3 4 5 27 28 29 30 31 32 33 35 40などの十四首である。そのギには音仮名の疑、義、宜、訓仮名の木などが用ゐられ、それらはいづれもギ乙類の仮名であるが、40のみは前述のやうにキ甲類枳を用ゐる。この十四首の中にはヤの音仮名として楊を用ゐる例（5 28 29 30 31 32 33 35）が多く、そこに意字的用法を見ることができる。

このヤナギの語源については様々な説があつて、それらは『日本国語大辞典』に列挙されてゐるが、そのいづれをも信じ難い。本稿に扱つた柳の歌四十首には、ヤナギと訓むべき一群（2 4 5 6 7 11 13 14 16 17 19 20 21 22 23 24 25 26 29 30 33 34 35 36 38 40）とヤギと訓むべき一群（1 3 8 9 10 12 15 18 27 28 31 32 37 39）とがあつて、この二つの語形を併せて説明し得る語源説が求められる。日本古典文学大系『萬葉集』二、三七八ページの頭注に見える説

ヤギは楊の字音yanをそのままヤギとしたもの。実際の発音はyanji であつたろう。これの鼻音を独立させたのがヤナギで yan → yanagi となつたのであろう。

を可とすべきであらう。前述のやうに楊をヤの音仮名として用ゐる八例もあり、ヤナギに対する古代人の語意識としては「楊な木」であつたはずで、その「な」は「たなごころ」「まなかひ」などに見える連体助詞の「な」である。また、ヤギは「楊木」で、連体助詞「な」を用ゐない形として意識されてゐたのであらう。

なほ、萬葉集以外の上代の文献にも柳が登場することがある。すでに紙面も尽きたので、その数例を掲げて本稿を閉ぢる。

○稲蓋智簸泥比野麗挺（かはそひやなぎ）水行けば靡き起き立ちその根は失せず（日本書紀歌謡八三）

○遣唐使頂幡八首、道場幡一千首、着牙漆几卅六、銅鋺器一百六十八、柳箱八十二（続日本紀養老六年十一月）

○林中柳絮の若く、梁上歌塵に似る。（懐風藻、五言詠雪一首、文武天皇）

○霜枯れの旨陀利夜那凝の（歌経標式）

○わが夜那疑緑の糸になるまでに見なく慨み懸けて組みたり（歌経標式）

——昭和五十六年八月稿——